

メールレター(39)

冬の名残りを留めるかのような激しい吹雪の中に街の風景がかき消されたのは、つい先日のことです。積もった雪が消えるのを待っていたかのように、ゆっくりと春がやってきました。いつもの激しい爆発するような、一夜にして芽や葉がでる過激な気候の変わり方ではなく、日々、光が柔らかく暖かくなり、芽が助走ラインに立っているそんな感じの春の兆しです。

窓辺のスズメたちも寒い冬を堪え忍び、春の日差しを受け、嬉しそうに毎朝やってくるようになりました。いつのことからだったのでしょうか、この群れに4羽のムクドリ加わりました。何千キロも旅をする渡り鳥なのだそうですが、渡り忘れたのかここに居着くのか、疑問を抱くことなく自然に群れに溶け込んでいるようです。

「羽のボチボチの点が何て綺麗なのかしら」

マダム田中は、長くちばしでパンくずをついばむ、ムクドリのくっきりと美しい図柄に、見とれてしまいました。

「あー、それは繁殖期には入っているということだよ。」

ドリトル先生も興味深そうに眺めています。

「ムクドリは、年に二回衣装替えをするんだ。普段はくすんだこげ茶でダサイのだけれど、繁殖期に入ると、メスをひきつけようと衣装替えをして、超美的になるうとするんだ。イケメン鳥なら、メスが寄ってきて、子孫をのこすチャンスが多くなるんだよ。」

「もしかして、スズメもそうかしら。」

「ムクドリほどではないけれど、多少は、羽の図案がはっきりして美しくなるようだね。」

「鳥の世界も、婚活は大変なのね。」

「自然界では、生きとし生けるものは、生き延びて遺伝子を残すためだけに生きているだけだからね。」

「人も、本来は同じなのかもしれないわね。」

木々はまだ枯れたままですが、光いっぱいの春の青空です。

「あー鳥のように、空を飛んでどこにでも行けたらねえ。」

ドリトル先生の深いため息。ドリトル先生とマダム田中は、羽をもがれ動けないムクドリのように、家に閉じこもるばかりです。コロナウイルス感染拡大で自宅待機が続いています。まだ、あと2週間は続くようです。

コロナウイルスは何と早くここにもやってきたのでしょうか。世界中に感染し始め、パニックになり始めた3月半ば、感染者が10人を越すやいなや、学校、公共施設、映画館、劇場、レストラン、喫茶店、美容室、歯医者や眼医者などの専門医などを、バタバタとわずか1日で、一斉に閉鎖する命令がでて、市民には外出禁止が言い渡されたのです。まばたきをする間もないのではないかと思うほどの素早さでした。少し遅れて、アメリカとの国境封鎖、州堺の封鎖となり、企業や工事も閉鎖となりました。全てが閉鎖され、接触を減らすようです。どこもかしこ

もひとけはなく、街はひっそりとしています。それでも、カナダの感染者4千人を越し、その半数はケベック州からでています。ケベック州の中でもモントリオール市は、最多の感染者数です。

この時期は避寒で暖かい所に行っていた人達が、戻ってくる時期です。フロリダから、3日間かけてキャンピングカーで帰ってくる人達も多いことでしょう。通過するニューヨークなどでは、買い物をしにお店に入ろうとして、軍隊に追い返された人もいるようです。戦々恐々とした緊張感が伝わってきます。モントリオールは、どちらかというバカンス感覚で、監視の合間をぬって、距離をたっぶりとりながら、ゆっくりと散歩をしている人たちも見かけます。やっとやって来た春ですから、無理ありません。

70歳を過ぎた人は危険度ナンバーワンのターゲットになり、外出はさらに監視されそうです。マダム田中は退屈しのぎに、家の掃除を、徹底敵に隅々まですることにしました。戸棚を開けて、ドリトル先生は、まずびっくり。

「完璧。埃もないし、食器も整然。コロナが続いてほしい。」

「明日は、貴方の洋服ダンスにしようかなあ？ 断捨離もするかも。」

何でも取っておくタイプのドリトル先生は、一瞬青ざめています。

「こんなことでは体力はおちてしまうね。」

「毎日1万歩、歩いていたのに。」

というわけで、体力キープのため、自転車こぎと素振り、ストレッチをタイミングに合わせて、飛べないムクドリの、マダム田中とドリトル先生のカップルはしております。